

## キプロス伝道 / ローマ総督の回心

使徒言行録は第13章より第2部に入る。アンティオキア教会を拠点とする使徒パウロとバルナバの世界宣教の開始の記録である。アンティオキア教会は、断食と祈りをして、手を二人の上に置いて祝福した後、バルナバとサウロを世界宣教へと送り出した。彼らはまずバルナバの郷里であるキプロス島に船出した。キプロスはアンティオキアから西へ約百キロの地中海にある東西176キロ、南北48キロ-80キロの横に長い島である。面積は日本でいえば鹿児島県とほぼ同じだという山が多く、昔から銅の山地として有名だった。

旧約の昔からユダヤ人が他数この島に移り狂んでいた。

東側の最初の町サラミスでは、使徒たちは、ユダヤ人会堂を手がかりに伝道を展開していった。その諸会堂で福音を語った後、彼らは島全体を巡回して、島の南西にあるもう一つの大きな町パフォスにやって来た。ルカが何ら言及することが無いことからして、パフォスに着くまで、伝道はなかなか困難で、思うようには成果をあげることはできなかったように見える。

なぜ困難であったのか？それはこの島が昔から神話と偶像礼拝の島、神々と悪霊の働きの盛んな島であったからである。パフォスはギリシャ神話の美と愛の女神アフロディテ(ローマ神話ではヴィーナス)の生誕地と知られ、アフロディテ礼拝が盛んに行なわれた。巡礼者も多かった。更に東から西から、あるいは北から他にも宗教が入り込み、まさに神々の入り乱れた神話と迷信の島であった。そのような宗教的状况の中に、占いや魔術という迷信が入り込むのは当然であろう。サウロとバルナバがパフォスで出会ったのは、そのような占い師バルレイエスという名のユダヤ人偽預言者エルマだった。

魔術というのは、いろいろな儀式や祈祷や形式を使って霊を呼び出し、その霊の力で不思議なことを行なうことによって人々に影響力を与えていこうとするものである。彼エルマはユダヤ人だったという。占星術やその他の宗教的儀式、呪術を行なって、神からの超自然的な告げを受けたかのように見せかけて、人々を惑わしていき、そのような魔術師、呪術師であった。当時、そういうユダヤ人巡回魔術師がいたことを使徒言行録は伝えている(8:9-24, 19:11-20)。

人間はそのような霊の働きの弱いことは今も昔も変わりがない。占いや占星術や魔術に目を奪われ、心奪われて、ついにその魂をそのような占いや迷信に明け渡してしまうのである。ローマの地方総督ともある者、賢明なセルギウス・パウルスも、魔術師エルマの影響を受けて、彼を宮殿に出入りさせ、事毎に相談していたのである。

福音宣教は悪の霊との戦いであり、信仰もまた悪の霊との戦いである(エフェソ6:10-20)。そのような困難な中で、聖霊は総督セルギウス・パウルスに働いてバルナバとサウロを通して神の言葉を聞く思いを与えられ、救いへと導かれた。救いは徹底的に神の恩寵であることを示す出来事であった。

福音が信じられるところ、必ず悪霊との戦い、偶像礼拝や迷信との対決があり、それからの解放が起る。そしてキリストの福音こそ、人間を忌まわしい偶像礼拝と迷信から解放する力である。総督セルギウス・パウルスの回心の記事によってルカはそういうことを伝えたいのである。

使徒言行録は、イエスキリストと出会うことによって、悪霊や迷信から解放されて行く魂の記録であり、そこに働くキリストの霊(聖霊)の恩寵の働きの記録である。その働きは今日も尚、続けられているのである。